

タイトル	北海道における中小企業家同友会の教育(5)
著者	竹田, 正直
引用	開発論集(99): 57-73
発行日	2017-03-17

北海道における中小企業家同友会の教育(5)

竹 田 正 直*

はじめに

北海道における地域経済発展の研究、就中、中小企業の発展にかんする政策研究にとって、自らの加盟企業を着実に増加させて、北海道経済にますます大きな影響をあたえてきている一般社団法人北海道中小企業家同友会の分析と研究は欠かすことができない。すでに経営者会員は、2016(平成28)年12月末現在で、5,912名に達している。全国都道府県に存在する中小企業家同友会全国協議会(中同協)のなかで全国第1位の組織数を誇っている。

この組織的発展のかなめとなっているのが、「共育」をキーワードとした社員教育や経営者の自己教育、とくに、幹部養成の「同友会大学」の教育、さらに、「経営者大学」の活動である。

今や、北海道中小企業家同友会が、北海道における地域経済発展のかなめ石のひとつとなっていることを象徴的に示したのが、2017年1月10日に札幌パークホテルで行われた一般社団法人北海道中小企業家同友会の新春講演会(15:30~17:00)と新年交礼会(17:30~19:00)であった。

新春講演会は、学ぶ同友会に恥じないもので、653名の経営者などが参加し、宇佐美隆札幌支部長が開会挨拶を行い、石川県同友会副代表理事で、ピーニンググループCEOの喜多甚一社長が、「貫き通す経営者の理念〜どん底から100億企業への軌跡〜」と題して、自らが、トラック1台所有の運転手から、2,100人の従業員、年商100億円の広範な物流企業のトップになるまでの30年間の経緯と教訓を、ユーモアをまじえながらエネルギーに講演した。

新年交礼会では、守和彦北海道中小企業家同友会代表理事の年頭の挨拶に続いて、来賓祝辞に登壇したのは、経済産業省北海道経済産業局児嶋秀平局長と、高橋はるみ北海道知事、秋元克広札幌市長であった。また、北洋銀行石井純二頭取と北海道銀行笹原晶博(まさひろ)頭取から祝電がよせられ、北洋銀行柴田龍取締役副頭取と北海道銀行山川広行取締役副頭取が列席した。祝杯は、北海道新聞社広瀬兼三代表取締役が行った。最後の閉会挨拶は、札幌信用金庫前田繁利理事長が行った。道内大学の理事長2名、学長5名、教授多数が参加した。(注1)

このように、北海道中小企業家同友会の新年交礼会への道内行政、金融、報道、研究教育など、各分野トップの多数の出席自体が、北海道中小企業家同友会への期待を表しているが、祝辞の内容も、同友会の理念や「共育」活動にふれて強い期待が表明された。

* (たけだ まさなお) 北海学園大学開発研究所特別研究員

これまで筆者は、「北海道における中小企業家同友会の教育」のテーマで、同友会大学の発足の経緯や理念、また、同友会の活動全般とともに同友会大学の発足を主導した一人である大久保尚孝氏（北海道中小企業家同友会初代事務局長，専務，中同協社員教育委員会委員長，中同協副会長等歴任，故人）の活動の一端を分析してきた。（注2）

これまでの第1期～第4期同友会大学の分析をもとに，本稿では，第5期（注3）と第6期同友会大学の分析を行う。

第1章 北海道中小企業家同友会第5期同友会大学

(1) 第5期同友会大学の日程と講義概要

第5期同友会大学は，第4期の1982年(昭和57年)11月4日(木)の卒業式から2ヶ月後，1983(昭和58)年1月11日(火)，18：00から開校式，同年5月10日(火)，18：00に卒業式という日程で実施された。会場は，同じく，札幌市中央区の第一ビルの同友会事務局会議室である。

第5期同友会大学の日程，単元構成と単元テーマ，講義テーマと担当者などの概要は，「資料1」で知ることができる。（注4）

講義回数は，開校式，5単元(各単元3～5講義)，総括講義，卒業式を入れて31回でこれまでと同様である。また，毎週，火曜日と木曜日の夜，18～21時も変わらない。

単元のテーマ，第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」，第Ⅱ単元「経営に関する法律問題」，第Ⅲ単元「企業会計の基礎知識」，第Ⅳ単元「現代営業幹部論」，第Ⅴ単元「科学技術論」，第Ⅵ単元「中小企業幹部論」も第4期と変わらないが，単元ごとの講義回数は，ほんの少し変わっている。

すなわち，第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」を，第4期の3回から4回に増やして，単元の最初に，「経済学とは何か～社会の発展と経済学の果たす役割」を新設し，名寄女子短期大学学長美土路達雄氏（北海道大学教育学部社会教育講座元教授）の講義を加えている。第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」の他の3人の講師のテーマも，担当者も第4期と同様である。

第Ⅱ単元「経営に関する法律問題」は，6回の講義のテーマが第4期と同様だが，講義の順番と担当講師の変更の2つの変化がある。前者の順番の変化は，従来，単元Ⅱのなかで第5番目の講義だった「法とは何か～判例にみる法の運用の研究」(札幌商科大学教授鈴木敏夫氏担当)を第Ⅱ単元のトップにしたことである。これは，従来トップの「日本国憲法の成立と今日的意義」(弁護士中村仁氏)を軽く見たという意味ではなく，第Ⅰ単元で「経済学とは何か～社会の発展と経済学の果たす役割」(名寄女子短期大学学長美土路達雄氏)を新設したことに対応し，経済や法の全体的構造と概念を最初に与えようとしたものと考えられる。

第Ⅲ単元「企業会計の基礎知識」は，第4期で5回講義だったものが4回になり，第Ⅱ単元で1講義増えた分をここで削減している。すなわち，従来，北海道中小企業家同友会専務理事大久保尚孝氏の「経営分析」が2講義行われていたのを1講義に削減したのである。大久保氏

は、かつて、大きな全国展開の銀行に勤め、企業への貸付け担当の経歴をもち、企業・経営分析のプロであり、その知識を活用して「経営分析」の講義を行っていたが、第Ⅰ単元の「経済学とはなにか」の新設にあたって企画者自身の講義を削減したことになる。第Ⅲ単元の他の3講義のテーマも担当者は変わっていない。

第Ⅳ単元「現代営業幹部論」は、4講義のテーマは変わっていないが、担当者が4人中3人が交代している。第1講義の「営業とは何か」は、白馬堂印刷(株)社長花井馨氏になり、第2講義「目標設定と達成の手順と方法(1)」のみ、第4期と同じ(株)共同印刷(現(株)アイワード)社長(現、会長)木野口功氏である。第3講義「営業幹部の任務と役割」は、(株)マルキンサトー社長佐藤三男氏が新しく担当し、第4講義「目標設定と達成の手順と方法(2)」が(株)ナニワ社長今田幸司氏に変わっている。

第Ⅴ単元「科学技術論」の5講義のうち、最初の講義のみが、サブテーマと担当者が変化している。第4期は「科学と人間～自然科学の発展と哲学の根本問題」(北海道大学教授田中一氏)であったのが、第5期では、「科学と人間～自然科学の発展と人間生活とのかかわり」(北海道大学助教授池内了氏)になっている。田中氏と池内氏は同じ研究分野なのでおそらく田中氏の都合か、田中氏の推薦による変更であろう。

第Ⅵ単元「中小企業幹部論」は、5講義であるが、第1講義と第2講義は、第4期と同様である。第3講義「部下をどう教育するか～現代人の社会心理と組織の活かし方～(1)」(北海学園大学教授後藤啓一氏)と第4講義「部下をどう教育するか～“知恵”のある人間を育てるために～(2)」(札幌商科大学教授方波見雅夫氏)は、第4期では、順番が逆転していたが、これは、どちらかの日程上の都合によると思われる。第5講義「これからの幹部に要求される幹部の資質と自己啓発の目標」は、新しい担当者の恒星設備(株)社長太田一彦氏であり、太田社長は、北海道中小企業家同友会の創設時の会員の一人である。

全体の総括講義は、北海道中小企業家同友会専務理事大久保尚孝氏で、従来と同様である。

(2) 第5期同友会大学の受講生及び卒業生の特徴

同友会大学第5期受講生は、2つの点でこれまでの最高であった。第1は受講生が60名で最も多かったことである。2点目は、54名の卒業という90%の卒業率の高さも最高であった。従来の卒業率は、第1回が82.5%、第2回が89.7%、第3回が82.8%、第4回が74.5%であった。(注5)

同友会大学の受講生増加は、基本的に企業の発展において人材養成が要であるとの共通理解があり、さらに困難ななかでも同友会大学に費用と時間的サポートをして送り出す経営者が着実に増加してきたことを示している。また、高いレベルの講義内容の人間形成における意味が理解されてきているといえる。なによりも北海道中小企業家同友会が着実に加盟経営者を増加させ、この時期すでに、3,900社に達したことが背景にある。

卒業生54名の特徴は、年齢が、25歳から48歳まで、男女別の表記がない名簿から考えると

資料 1 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第 5 期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1983 年 1 月 11 日(火)	開 校 式	◎学長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査， 一般教養テスト	
13 日(木)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎経済学とは何か ～社会の発展と経済学 ^(ママ) の果たす役割～	名寄女子短期大学 学 長 美土路達雄氏
18 日(火)	//	◎戦後日本経済史と中小企業の位置づ けについて	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
20 日(木)	//	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
25 日(火)	//	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
27 日(木)	単元Ⅱ 経営に関する法律問 題	◎法とは何か ～判例にみる法の運用の研究～	札幌商科大学 教 授 鈴木 敬夫氏
2 月 1 日(火)	//	◎日本国憲法の成立と今日的意義	弁護士 中村 仁氏
3 日(木)	//	◎商取引に関する法律知識	弁護士 山中 善夫氏
8 日(火)	//	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
10 日(木)	//	◎ // (2)	同 上
15 日(火)	//	◎労働法の基礎知識	弁護士 後藤 徹氏
17 日(木)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎経営分析	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏
22 日(火)	//	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏
24 日(木)	//	◎資金繰り表の作り方	税理士 平田 清二氏
3 月 1 日(火)	//	(特別講義) 企業の実力を判断する為には？ 危い会社の見分け方	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
3月3日(木)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	白馬堂印刷(株) 社 長 花井 馨氏
8日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (1)	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
10日(木)	//	◎営業幹部の任務と役割	(株)マルキンサトー 社 長 佐藤 三男氏
15日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (2)	(株)ナニワ 社 長 今田 幸司氏
17日(木)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活との かわり～	北海道大学 助教授 池内 了氏
22日(火)	//	◎現代の技術革新はどこまで進んで いるか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 助教授 荒川 泓氏
24日(木)	//	◎コンピューターの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
29日(火)	//	◎生産管理について ～作業管理, 品質管理, 工程管理な ど～	北海道工業大学 教 授 川島 正治氏
31日(木)	//	◎中小企業の技術開発その発想と具体 例	(株)光合金製作所 社 長 井上 一郎氏
4月5日(火)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー ～営業と職場のマナーの再点検～(1)	北海道同友会 事務局長 国吉 昌晴氏
7日(木)	//	◎幹部に必要な現代のマナー ～話し言葉の再確認～ (2)	(株)北海道邦楽邦舞協会 (元 HBC アナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
12日(火)	//	◎部下をどう教育するか ～現代人の社会心理と組織の活かし 方～ (1)	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
14日(木)	//	◎部下をどう教育するか ～“知恵”のある人間を育てるため に～ (2)	札幌商科大学 教 授 方波見雅夫氏
19日(火)	//	◎これからの幹部に要求される幹部の 資質と自己啓発の目標	恒星設備(株) 社 長 太田 一彦氏
26日(火)	総 括 講 義	◎中小企業の未来と私たちの課題	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 5月10日(火) 18:00～21:00

資料1 出典：北海道中企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第5期），国吉昌晴事務局長責任編集
『同友会大学第5期生記録集，“挑戦”』，北海道中企業家同友会社員教育委員会発行，1983年6
月，12～13頁。

圧倒的に男性であり、名前からの推定で1名か2名の女性がいるかどうかである。

役職は、多くが部長、所長、次長、課長であり、取締役が4名いる。

勤務先の所在は、圧倒的に札幌市であるが、苫小牧、江別、岩見沢、小樽、恵庭からも来ており、遠くは、上川郡の層雲峡から通って卒業した北海道林友観光(株)（現、(株)りんゆう観光）の佐藤文彦氏と同じく沢崎新一氏の2人がある。片道3時間程をかけての毎週2回の受講は並大抵の努力ではできないことである。帰宅は真夜中の12時を超えるであろう。さらに5本のレポートと卒業論文の執筆である。54名の卒業者のうち32名、59%が皆勤賞を得ているが、層雲峡から通った2人も皆勤賞を受けている。実に頭が下がる思いである。

(3) 第5期同友会大学卒業生の特別表彰と評価

最高の卒業率や多数の皆勤賞受賞者をだした第5期は残念ながら優等賞（レポートおよび卒業論文の平均が80点以上）はでなかったが、平均75点以上の努力賞が2名、青山修三氏（(株)青山ブリザーブ）と金子房生氏（(株)宇佐美商会）である。金子房生氏は、卒業生を代表して、卒業式で答辞を読んでいる。

青山修三氏は、レポート課題「戦後日本の高度経済成長をもたらした国際・国内の諸条件を分析し、今日の不況・低成長を生み出した要因との関連を述べよ」について見事な論文を「高度経済成長～その過程・破綻と現代」のテーマで(注6)執筆している。

青山氏は、“もはや戦後ではない”といわれた高度成長は、1955年(昭和30年)にはじまりオイルショックに端を発した、本格的な不況へと転落する不気味な前夜、1973年(昭和48年)までの19年間に二けた成長率の年が8回、平均でも9.8%の驚異的な成長率を示し、神武景気、岩戸景気、オリンピック景気、いざなぎ景気、インフレ景気を区分している。なべ底不況や円不況があってもすぐ克服されてきたが、いまや長期不況を迎えているとしている。

「高度成長のもたらしたもの」として、青山氏は、①重化学工業の発展、②輸出の急増と外貨、対外資産の蓄積、③国民の生活水準の向上をあげている。また、これらの資料や数値を提示している。

「高度成長へ導いた推進力とは？」として、①設備投資の急増、②innovation(技術革新)、③人口動態の大変動、④エネルギー革命、をあげている。

「高度成長がもたらしたひずみと長期停滞」として、1974年に戦後初のマイナス成長(−1.3%)が始まり、経済停滞＝失業率増大と慢性的物価上昇が同時進行している。さらに、この原因はアメリカのベトナム戦争と金保有の6倍ものドル発行のためであり、ニクソンショックをもたらしたという。

「その長期停滞化への諸問題とは何か？」として、①stagflationの危険と政策選択の狭さ、②後進国の経済困難の進展、③貿易摩擦と中心国の欠如、④innovation(技術革新)の停滞をあげている。

最後に、「北海道経済自立論をどう考えるか」として、常に、経済的植民地、つまり「内国植

民地」として北海道は位置づけられ、日本経済の「調節弁」としての役割を負わされてきたと見て、農村漁村、産炭地の疲弊を提示している。そして「北海道自立論」の意味するところは、財政上の切り捨てであると指摘し、行政投資を訴えている。

金子房生氏は、単元Ⅱ「経営に関する法律問題」の課題「日本国憲法成立の歴史的意義は何か。現在の日本において、われわれは、日本国憲法のもつ重要性をどのように再認識する必要があるか。貴方の思うところを述べよ」という課題にたいして、「日本国憲法の重要性をどう認識するか」のテーマで執筆している。(注7)

まず金子氏は、日本国憲法は、昭和20年8月15日のポツダム宣言の受諾に始まるとしている。ポツダム宣言に示された「日本国民の民主主義的傾向の復活強化」、「言論・宗教及び思想の自由、並びに、基本的人権の尊重」、「日本国国民の自由に表明せる意思に従い、平和的傾向を有し、かつ責任ある政府の樹立」(10項・12項)を受諾したのであり、これらの条項の中から生まれたものであると言う。

「日本国憲法の原理」として、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義について、「どのような歴史の動きの中から発生・発展した原理であるかを考えたい」と述べ、3つの原理のそれぞれを、とくに、基本的人権と平和主義については、歴史的な伝統をふくめて分析している。

最後に、「憲法改正論議について」として、改正論のいう、「押しつけられた憲法」、「日本の歴史・伝統を無視」、「非現実的憲法」にたいして、「戦後日本の改革と再建に果たした歴史的意義・役割を正當に評価していないと考える」と批判し、「この憲法を我々のものとして育て、発展させて行かねばならないと考える」とまとめている。

(4) 第5期卒業生への祝意と評価

北海道中小企業家同友会社員教育委員長の関口功四郎同友会大学学長は、卒業式で次のような祝意を述べた。

「自信と誇り——それは、自分自身を成長させていく良い材料になるものです。(中略) 皆さんは、この大学で学んだ事を基にして種まきをされたわけですから、明日からは、自分で水や肥料をやっていただきたい。(中略) 企業は、これからが大変な時代です。……若木は嵐に鍛えられると言いますが、大木になる前の苦勞をいとわないでください。……共に巣立つ同期の方々との連帯を大切にしてください。これからは、規模の大きさで優劣が決まるのではなく、人の質が個々の企業の勝敗を決します。皆さんの益々の御健闘を念じて止みません。」(注8)

また、全体の講評を担当している専務理事の大久保尚孝氏は、第5期生の卒業率90%を高く評価し、さらに、「第五期生は全体的に受講態度も真面目で……企業の代表者としての気迫がうかがわれました。」と評価している。レポートや卒業論文の評価では、平均点80点以上の「優秀賞」が、これまで毎回でいたのに今回はいみせんし、卒業式で朗読をお願いするほどの卒業論文もなく、「中間のところで粒ぞろいだった」と指摘した。同友会大学の評価は、①提起さ

資料 2 第 5 期卒業生答辞

答 辞

新緑の鮮やかさが日一日と増す今日、私達同友会大学第 5 期生の卒業式を迎えるにあたり、代表理事をはじめ御臨席の皆様から温情溢れる御祝辞を賜りましたことは、誠にありがたく心から感謝申し上げる次第であります。

かえりみますと、1 月 11 日の入校以来週 2 回、1 日 3 時間の講義をうけ、6 回のレポート提出に迫われたこの 4 ヶ月間は、非常に長かったようにも、又、短かく過ぎ去ったようにも思え、卒業を迎えた今、感慨新たなものを覚えます。

この 4 ヶ月間の学習は、4 年制大学での講義内容以上の中味の濃い、充実したものでした。

受講にあたり、期間中私達を熱心にお導き下さいました諸先生をはじめ経営者の皆様、同友会事務局の皆様、更には職場の皆様の温かいお心づかいと励ましに支えられ、本日こうして晴れの卒業の光栄を得ましたことに心から御礼申し上げます。

私達をとり巻く社会環境は、内外ともに政治的にも経済的にも激しく変動し変化しています。この様な現状の中で私達は、同友会大学で日本経済における中小企業の位置付と、中小企業の社会的、歴史的使命を学び、日本経済の平和的で民主的な発展の重要性を学びました。

又、国民の要望に応え、国民と共に歩む企業が自らの手で展望を切り開く事的重要性も学びました。

私達は、同友会大学で学びました知識を糧として、知恵を働かし、どのような局面を迎えようとも、問題を解決し、時代の流れに即応できる企業づくりを行なっていかなければならないと、深く心にとめております。そのためにも同友会大学で私達が身につけた学ぶ事への習慣と、学ぶ事への前向きな姿勢を社内に広げ、問題意識と、生きた知識をもった人づくり、企業づくりの先進者として、主体的活動を展開していかなければならないと考えております。又、4 ヶ月間共に学んだ同友会大学第 5 期生の連帯の輪をこれからも一層広げるためにも、諸先生方に引き続き御指導をいただきたいと考えております。

最後に卒業生一同に代わり、諸先生をはじめ、経営者の皆様並びに同友会事務局の皆様、重ねて心から感謝を申し上げ、また御臨席の皆様からいただきました御言葉に対し、厚く御礼申し上げ答辞といたします。

1983 年 5 月 10 日

北海道中小企業家同友会
同友会大学第 5 期生代表
榎宇佐美商会

金子房生

れた課題に対して、どれだけ本質に迫って考え、徹底的な分析ができたか、②創造的に読みこなし、発展的総合的につかんでいるか、③自分独自の表現を使い、新しい論理が展開できているか、の 3 点であると改めて注意を喚起した。ポイントの押さえ方が曖昧だったり、平均 50 点ストレスレだったり、と厳しく述べ、今後一層の研鑽をうったえとともに、「誇りを胸に、卒業生の名にはじない大きな成果をあげられることを心より期待いたします。」と激励した。

北海道中小企業家同友会代表理事で、卒業式祝辞をのべた石山鉱業(株)社長の石山博規氏は、経営者大学での自身の落第にふれながら、同友会大学は、入るのは易しいが出るのは難しいところで、優秀賞こそないけれども、一定水準に達して卒業できたことは大変なことです、と祝

意を述べ「同友会大学で学び得た事を多方面で活用し、北海道の中小企業の要となって働いていただきたい。」とエールを送った。(注9)

同友会事務局長の国吉昌晴氏は、お祝いを述べたあとに、受講生の大変な日常にも触れている。「会社の応援体制もさることながら家庭内の協力も大きかったことでしょう。“テレビを見ながら水割り”のスタイルが一変して、“参考書を積み上げてレポート作成”となったのですから、奥さんも子供もびっくりしたはずです。なかには、平日は家族を早々と休ませ、日曜日は夕方まで外に追い出し、レポート作成に専念した方もおります。」と、さすが事務局長として、受講生ときめ細かく対話していた様子が伺える編集後記である。

第2章 北海道中小企業家同友会第6期同友会大学

(1) 第6期の日程と講師及び受講生

北海道中小企業家同友会第6期同友会大学は、第5期の卒業式の2ヵ月後、1983年7月12日(火)の開校式から、同年11月8日(火)の卒業式まで、これまでと同じく、講義が29回、開校式と卒業式を入れて31回で行われた。

単元のテーマ、第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」、第Ⅱ単元「経営に関する法律問題」、第Ⅲ単元「企業会計の基礎知識」、第Ⅳ単元「現代営業幹部論」、第Ⅴ単元「科学技術論」、第Ⅵ単元「中小企業幹部論」は第5期と変わらないし、単元ごとの講義回数も変わっていない。「資料3」を参照。

担当講師が、若干入れ替えがあったことと単元内での講義の順番が少し変わっただけである。すなわち、第Ⅰ単元「日本経済と中小企業」の第1講義が、講義テーマは同じだが、担当者が、名寄女子短期大学学長美土路達雄氏から、新たに北海道大学教授森杲氏に変わったことである。

また、第Ⅲ単元「企業会計の基礎知識」の第1講義が、同友会専務理事の大久保尚孝氏から、新たに税理士の上村昭紀氏に変わった。第Ⅳ単元「現代営業幹部論」は、第4期から第5期への変化と同じく、担当講師が4人中3人が変わった。この単元は、同友会の会員社長が順番に担当することになっていると考えられる。(株)共同印刷(現、(株)アイワード)社長の木野口功氏(現、会長)のみが継続している。

第Ⅳ単元「現代営業幹部論」は、4講義のテーマは変わっていないが、担当者が4人中3人が交代している。第1講義の「営業とは何か」は、白馬堂印刷(株)社長花井馨氏から、(株)住まいのクワザワ社長山本正信氏になり、第2講義「目標設定と達成の手順と方法(1)」のみ、前述のように第5期と同じ(株)共同印刷(現(株)アイワード)社長木野口功氏である。第3講義「営業幹部の任務と役割」は、(株)マルキンサトー社長佐藤三男氏から、新たに(株)とんでん販売副社長益川弘氏が担当し、第4講義「目標設定と達成の手順と方法(2)」が(株)ナニワ社長今田幸司氏に替わって、(株)札幌桜井鉄工所社長森岡彬真氏が担当している。

第Ⅴ単元「科学技術論」の5講義のうち、第2講義の担当者が同じ北海道大学助教授の荒川

資料 3 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第 6 期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1983 年 7 月 12 日(火)	開 校 式	◎学長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査， 一般教養テスト	
14 日(木)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎経済学とは何か ～社会の発展と経済学の果たす役 割～	北海道大学 教 授 森 杲氏
19 日(火)	//	◎戦後日本経済史と中小企業の位置づ けについて	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
21 日(木)	//	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
26 日(火)	//	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
28 日(木)	単元Ⅱ 経営に関する法律問 題	◎法とは何か ～判例にみる法の運用の研究～	札幌商科大学 教 授 鈴木 敬夫氏
8 月 2 日(火)	//	◎日本国憲法の成立と今日的意義	弁護士 中村 仁氏
4 日(木)	//	◎商取引に関する法律知識	弁護士 太田 勝久氏
9 日(火)	//	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
11 日(木)	//	◎ // (2)	同 上
16 日(火)	//	◎労働法の基礎知識	弁護士 後藤 徹氏
18 日(木)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎経営分析	税理士 上村 昭紀氏
23 日(火)	//	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏
25 日(木)	//	◎資金繰り表の作り方	税理士 平田 清二氏
30 日(火)	//	(特別講義) 企業の実力を判断する為には？ 危い会社の見分け方	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
9月1日(木)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	(株)住まいのクワザワ 社 長 山本 正信氏
6日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (1)	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
8日(木)	//	◎営業幹部の任務と役割	(株)とんでん販売 副社長 益川 弘氏
13日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (2)	(株)札幌桜井鉄工所 社 長 森岡 彬真氏
20日(火)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活との かわり～	北海道大学 助教授 池内 了氏
22日(木)	//	◎現代の技術革新はどこまで進んで いるか ～社会の発展と技術の歴史	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
27日(火)	//	◎コンピューターの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
29日(木)	//	◎生産管理について ～作業管理, 品質管理, 工程管理な ど～	北海道工業大学 教 授 川島 正治氏
10月4日(火)	//	◎中小企業の技術開発 その発想と具 体例	(株)光合金製作所 社 長 井上 一郎氏
6日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー ～営業と職場のマナーの再点検～(1)	北海道同友会 事務局長 国吉 昌晴氏
11日(火)	//	◎幹部に必要な現代のマナー ～話し言葉の再確認～ (2)	(株)北海道邦楽邦舞協会 (元 HBC アナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
13日(木)	//	◎教育とは何か ～教育の目的と効果的な教育・学習 方法について	北海道大学 教 授 高村 泰雄氏
18日(火)	//	◎部下をどう教育するか ～現代人の社会心理と組織の活かし 方～ (1)	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
20日(木)	//	◎部下をどう教育するか ～“知恵”のある人間を育てるため に～ (2)	札幌商科大学 教 授 方波見雅夫氏
25日(火)	総 括 講 義	◎中小企業の未来と私たちの課題	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 11月8日(火) 18:00～21:00

資料2 出典：北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム(第6期), 西谷博明事務局長責任編集
『同友会大学第6期生記録集“創造”』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1983年12
月, 8～9頁。

泓氏から、北海道大学助教授の吉田文和氏に変わっている。

第Ⅵ単元「中小企業幹部論」は、5講義であるが、第2講義「教育とは何か～教育の目的と効果的な教育・学習方法について～」が新設され、北海道大学教授高村泰雄氏が担当している。順番が送られ、第5期の「これからの幹部に要求される幹部の資質と自己啓発の目標」がなくなった。(注10)

受講生は、46名で、第5期の60名からは大幅な減少となっているが、第1～4期と比較して、それほど少ないわけではない。卒業生の中で、札幌市以外からは、苫小牧と小樽からである。もっとも、入学時は札幌勤務だったが、8月1日から室蘭支店長となった㈱土屋ホームの山脇辰明氏のように3カ月間、車で室蘭から通って卒業した熱心な受講生もいる。

同じく、卒業生名簿からみた女性の受講生は少なく、㈱共同印刷(現㈱アイワード)取締役・管理部長鈴木礼子氏のみと思われる。

役職では、第6期も部課長が多いが、2人の代表取締役を含めて取締役が7人で、第5期と比較して非常に高い比率である。

(2) 第6期同友会大学卒業生の特別表彰と評価

卒業式は、1983年11月8日(火)18時から行われたが、第6期は、46名の受講生中、39名が卒業し、卒業比率は、84.8%であった。この卒業比率は、これまでの第3位であった。

特別表彰は、レポートと卒業論文の平均点80点以上の優等賞は1名で㈱土屋ホームの高島和雄氏である。平均点75点以上の努力賞も4名、㈱日本除雪機製作所岩田伸一氏、マルコー衣料㈱金子真土氏、㈱住まいのクワザワ小浪力氏、㈱和光繊維(現、㈱和光)宮川正寿氏であった。皆勤賞が卒業生39名中、23名(59%)で、これまでの第3位でした。

専務理事の大久保尚孝氏は、卒業式で、いつものように厳しくも温かい講評を行った。

「第6期卒業生は、おしなべて、皆さん粒ぞろいでした。さすが、各企業えり抜きの幹部だけのことはあります。……気がかりな平均点ですが、第2位でした。……過去最高点であった第一期生の67.3点にタッチの差で届かなかったとだけ申し上げておきます。……全体として飛び抜けて優秀な人はいませんでした、中の上くらいのところが多かったと言えるでしょう」(注11)

なお、レポートの問題点としては、読むのに骨が折れることがままあることや、オリジナルや発展的内容が少なく、中には、活字から手書きに“翻訳”したことがわかるものもあったと指摘している。

第6期生卒業記録集を責任編集した事務局次長の西谷博明氏は、皆勤の裏には「血のにじむような努力があったことでしょう」といったり、「会社の応援体制はもとより、家族をあげての励ましも大きかったことと思います。」子どもが、「私も受験勉強がんばるから、お父さんもがんばって」、「卒業できたのも、家族全員の協力があったからよ。卒業証書は我が家の宝として飾っておきましょう。」、「厳しく、苦しかったけれども、こんなに充実した日々を送ったのは初

めて」等々、受講生の生の声を紹介している。

(3) 第6期卒業生への卒業祝いと励まし

11月8日の卒業式で、北海道中小企業家同友会社員教育委員長の関口功四郎同友会大学学長は、「私の信条としていることですが、物事を完成させるにあたって大切なことが三つあります。それは、『力』、『愛』『慎しみ』です。力とは、知識・能力・技術など幹部としての責めを果たすためになくてはならないものです。自分を愛することは自らの価値を理解することであって、そのことによって相手の価値も理解できます。自分を愛することは、すべての人を愛する原動力になります。慎しみは、理性的な判断、冷静で客観的な物の見方のことで幹部にとって必要なことです。」関口学長は、ついで、雪印創業者の黒澤西藏氏の立派なリングを採るなら根を大事にせよとの教えを述べ、「どうか皆さん、同友会大学で学んだことを糧として、ひたむきに生きて下さい。そのことによって本当に社会の役に立つ人間になることができるのです。」とむすんでいる。

この関口学長の「社会の役に立つ人間」は、重要な意味を持っている。多くの企業家、経営者は、「会社に役立つ人間」のために受講料を「会社」が負担して同友会大学へ幹部を送ってくる。したがって、同友会大学を卒業した幹部社員が、その後何らかの理由で退職や転職をして「会社」を離れると、受講料を負担して「損をした」と感じてしまう。それが、関口学長のように「社会」に役立つ人間の教育に受講料を負担したのであれば、卒業生がどこへ転職しても喜んで送り出せる。同友会の多くの経営者が、近年、同友会の共同求人活動を活用して、より優れた人材を企業に採用し、同友会の新入社員教育システムを活用して教育するとともに、他方で、誰もが優れた人間に育つようにと、地域に積極的にかかわり市町村の教育委員として積極的に教育活動をしはじめているのもこのような「社会に役立つ人間」の形成を願うからにほかならない。

祝辞を述べた北海道中小企業家同友会代表理事で㈱サンコー社長の三浦隆雄氏は、「『人生苦あれば楽あり』です。苦労しながらも充実した4ヶ月間の経験をこれからの人生の上に生かして下さい。本日、卒業証書を手にした喜びを糧としてたくましく生き抜いて参りましょう。」と激励したが、この三浦氏の励ましにも、「人生」に生かすとの、関口氏の「社会」に通ずる広い視野が含まれている。(注12)

北海道中小企業家同友会の優れた先達が、すでに、30年以上前に、自己の企業や「会社」のみにとらわれない広い視野での社員共育を展望していたことは優れた先見性といえる。

おわりに～共育について～

1973年の中小企業家同友会全国協議会(略称：中同協、1969年11月17日、東京で設立総会、78名参加)の第5回全国総会(愛知)で、北海道中小企業家同友会から、次の3点が「同友会

答 辞

高度成長の華やかなりし頃、日本列島改造論の浮かれ囃子に乗って、日本中が舞い狂っていた時、日本の将来、なかなづく中小企業の行く末を、真に憂い強い危機意識をもって冷静な姿勢で対応策を考え抜いていた一団の人々がいました。大久保専務が編集し発行された「人間をつくる」の冒頭で明らかにされているように、北海道中小企業家同友会も、そのひとつでありました。

やがて、囃子が止んで確実にくるであろう危機的な状況の中で不動の経営基盤をつくるには、確固たる理念に基づく、教育方針を貫くこと、それを通して真の人材を育成しなければ大変なことになることを、同友会では明瞭に喝破し、かつ着実に実行を重ねて今日を迎えております。

同友会の教育理念の真髄は、単なる小手先の技術論ではなく、「人間として人間らしく生きること」をメインテーマに「共に人間として育ち合う土壌づくり」の輪を広げることにあることを学びました。同友会の歴史は、文字通り事務局とその会員と多くの先輩諸氏による、汗と涙の土壌づくりそのものではなかったかと思えます。

今、同友会大学の卒業に当たって思うことは、4カ月のきびしい教育を経験し、この同友会の理念と実践行動の歴史を、実感することができたということであります。

かつて同友会の経営者諸氏が予見された通り、私たち中小企業を取り巻く環境は一段ときびしくなっております。私どもも日頃、いかに生きのび、いかに着実な発展を成し遂げるかを最大の課題として努力いたしておりますが、往々にして“木を見て、森を見ず”の誤ちをおかしかねません。

そんな時、同友会大学で諸先生より教えていただいた知識、思想、さらにレポート、卒論等で自ら思索し学んだ数々の課題は、これからの行動の道標・指針として、必ずや役立たせていただけるものと思えます。

同時に、短期間にこれだけハードで、しかも高度な学習を自分なりにやり遂げたという誇りは、人間形成の面でも、大きな影響を受けずにはおかないのではないかと確信しております。

また、これを機会に多くの会社の中堅幹部の皆さんとも知り合うことができ、同期生として連帯心を深め、一企業の枠を越えて、切磋琢磨できたことは、大きな収穫の一つではなかったかと考えています。

最後に、多忙中、懇切丁寧に、しかも情熱を込めて講義して下さった講師の諸先生、きびしい中に思いやりのある叱咤激励を続けて下さった事務局の皆さん、さらに、このように意義深い同友会大学の受講機会を与えて下さった会社・社長の皆さんに心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました!!

これを機に、一段の成長と努力をおしまないことを決意申し上げ、答辞にかえさせていただきます。

1983年11月8日

同友会大学第6期卒業生代表
株式会社 土屋ホーム

高 島 和 雄

の目的」として原案が提起された。

「第1に、中小企業の社会的な信用を高めるために、企業の経営体質を自力で強化し、労働環境を整え、経営指針を確立し、就業規則の作成・見直しを進める。

第2に、社員の誇りとやる気を引き出すために、労使がともに学び合う姿勢で経営者が先頭に立って、学者や教師の協力を得ながら『共育』活動を推進する。

第3に、上記の成果を示しながら、地域との“共学，教育，共生”の関係を創造できる中小企業の持つ可能性を学校や父母に訴えてゆく。」(注13)

さらに、同友会が求める人材としての人間像を、「第1に、周囲から信頼され、他人に思いやりがありリーダーシップがとれる人。第2に、仕事と人生との関わりをしっかりと自覚し仕事の中によろこびや生きがいを見出すことができる人。第3に、物事を大局的立場で本質的に判断でき、自主的・創造的に対応できる人。第4に、心身ともに健康で、私生活を自ら律していきける人。第5に、人との触れ合いを大切にし、積極的な謙虚さもってたえず成長をとげていく人。」と提起している。これを実現するために、第2次大戦後に制定された日本国憲法と教育基本法を原点とし、経営者も従業員も共に学びあうことを社員教育の核心としている。(注14)

北海道中小企業家同友会が、中同協5回全国総会(愛知)で、社員教育を「共育」と提起したが、この「共育」を、いつから、どういう経緯と意味で用い始めたかは未解明の課題である。

筆者自身は、1964年12月25日公開の雑誌論文で提起している。「教育は“共育”であり、教育の主人公は生徒である」と書き、“共育”は集団を教育する際のカナメともいえる概念であるとし、第1に集団の成員相互の訓育作用であり、第2に、教育者と教育を受けるものとの相互の訓育作用である、という2つの内実を有する概念としておよそ52年前から、つまり、中同協や北海道同友会の結成以前から用いている。(注15)

その後、さらに、ヴィゴツキーの知識の最近接領域論にもとづく人間の発達のメカニズムとも関連して論じている。

第5期同友会大学では、関口学長が、「同友会大学で学んだことを、是非プラスの方向に生かす努力をお願い致します。そして、共に巣立つ同期の方々との連帯を大切にしてください」(注16)と、同友会大学同窓会での将来にわたる成員の相互作用としての「共育」を提起している。また、講師として初めて「科学と人間～自然科学の発展と人間生活とのかかわり」を担当した北海道大学助教授池内了氏(現、名古屋大学名誉教授)は、「本当に学びたい方が困難をいとわず勉強する姿を目の前にして、私自身深く感動させていただきました。講義を担当した私の方が、皆さんから色々なことを学ばせてもらい、心より感謝しております。」(注17)と、祝辞のなかで、指導者と学習者の相互作用の「共育」について感動的に述べている。

第6期同友会大学では、自身も第1期同友会大学卒業生である同友会大学同窓会長でダイヤ冷暖工業㈱常務(その後、社長、会長)岡村敏之氏は、「『我々経営者や幹部が学ばずして社員教育とはおこがましい』という同友会大学の学びの精神は第六期の皆さんに、今、引き継がれたのです。」と「共育」精神の伝達を強調し、そのうえで、同窓会では、①最低年1回の同期会の自主的開催、②同窓会全体の一泊研修会の開催、③同友会が開催する研究会などに積極的に参加し、自らの資質を高め、学ぶ気風を職場に定着させる先頭に立つ。更に同友会発展の先頭に立つ、との「共育」課題を提起している。(注18)まさに、「共育」のもつ、指導者と学習者の相互作用の「共育」と学習者同士の相互作用としての「共育」の両側面を統一的に提示したと言える。岡村氏がその後、企業でも、また、同友会全体でも、同友会大学学長としても、先

進的に活動してゆく素地がすでに顕在していたと言える。

なお、今回は、可能なら第8期同友会大学まで執筆したいと考えたが、なしえず、今後の課題としたい。

注

(注1) 一般社団法人北海道中小企業家同友会『2017 新年交礼会』冊子, 2017年1月10日, 1頁。

なお、筆者自身も新春講演会と新年交礼会に出席した。

(注2) 竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第90号, 2012年9月刊, 21~39頁。

竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(2)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第92号, 2013年9月刊, 141~160頁。

竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育と大久保尚孝氏」, 中小企業家同友会全国協議会企業環境研究センター編『企業環境研究年報』, 第18号, 企業環境研究センター刊, 2013年12月30日, 81~96頁。

竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(3)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第94号, 2014年9月刊, 19~32頁。

竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(4)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第96号, 2015年9月刊, 1~15頁。

(注3) 北海道中企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム(第5期), 国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第5期生記録集, “挑戦”』, 北海道中企業家同友会社員教育委員会発行, 1983年6月。

(注4) 前掲同, 12~13頁。

(注5) 前掲同, 2頁。

(注6) 前掲同, 7~14頁。同書の論文テーマは編集部がつけたものであり、あくまで、課題に対する回答として執筆している。

(注7) 前掲同, 27~30頁。なお、金子房生氏の「答辞」は73頁。

(注8) 前掲同, 1頁。

(注9) 前掲同, 11頁。

(注10) 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム(第6期), 西谷博明事務局次長責任編集『同友会大学第6期生記録集 “創造”』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1983年12月, 8~9頁, 資料4の高島和雄氏の答辞は67頁。

(注11) 前掲同, 2頁。

(注12) 前掲同, 関口氏は1頁, 三浦氏は7頁。

(注13) 中小企業家同友会全国協議会『新・共に育つ』, 2012年11月1日刊, 124頁。) なお、中同協設立総会(1969年11月17日, 東京, 78名参加)については、中同協30年史編纂委員会『中同協30年史一時代を創る企業家たちの歩み』, 中小企業家同友会全国協議会, 1999年7月8日刊, 77頁を参照。東京, 神奈川, 名古屋, 大阪, 福岡の同友会と、北海道と京都の準備会が参加した。北海道は、直ちに、1969年11月22日に札幌で25名で結成総会を持った。

(注14) 北海道中小企業家同友会, 西谷博明責任編集『北海道中小企業家同友会創立30周年記念誌, 共学・共育・共生の30年 1969~1999年』, (株)アイワード印刷, 1999年11月12日発行, 前掲, 275~278ページ。

(注15) 竹田正直「集団主義教育の立場と今日的観点」, 『ソビエト教育科学』第23号, 1964年12月

25 日刊，128～133 頁。

(注 16) 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第 5 期），国吉昌晴事務局長責任編集『同友会大学第 5 期生記録集 “挑戦”』，北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行，1983 年 6 月，1 頁。

(注 17) 前掲同，15 頁。

(注 18) 前掲『同友会大学第 6 期生記録集 “創造”』，7 頁。